夕食後の時間を1歳児の部屋で過ごす。開に集まっているが、おのおの好きな遊びをしている。（にじのいろ保育園／東京・府中市）撮影／丸橋ユキ

心を育てる保育環境

Vol.10

延長保育・預かり保育をポジティブな時間に

夕方にかけて順次、子どもたちが降園していく一方で
延長保育・預かり保育で園に残る子どもたちがいます。
これらの時間をポジティブにとらえ、
子どもたちが豊かに過ごせる環境を考えてみましょう。

お話・写真
さとう まさゆき
佐藤将之先生
早稲田大学人間科学学術院准教授。専門はこども環境学、環境心理学、建築計画学。建築や都市におけるフィールドサーベイを通じて人間行動と環境との相互作用に関する研究を進めている。特に、こどもの環境・行動研究を進め、それらをもとに建築・都市における環境デザインを追究している。

預かり保育の時間帯に3歳以上が0・1・2歳と過ごすシーン。3歳以上の子どもたち（清潔着を着ている）は、分かれて0・1・2歳児と遊んでおり、目で見てわかりやすい異年齢交流が行われている。（さくらのもり保育園／埼玉・久喜市）

家族のように過ごす延長保育

通常保育のクラスは、年齢別やー～2歳差の異年齢で編成されることが多く、大きな年齢差のある子どもたち同士が居合わせる機会は少ないことでしょう。体の大きな子どもたちが活発に動けば、同じ部屋の中で過ごす年下の子どもたちからすれば、安全が脅かされることになってしまいます。

けれど延長保育や預かり保育では通常より人数規模が小さいので、年齢差の大きな子ども同士でも交流しやすくなります。年上の子は自然と年下の子の遊び相手になり、できないことをやってあげたりします。年下の子は自分にできないことをする様子を見て憧れ、まねをしたりするなど、異年齢が交わるメリットは、読者のみなさんが理解されていることと思います。

今回取り上げた多くの事例から読み取れるのは、すわっているシーンが多いことです。部分的にマットやじゅうたんを敷いて床座になれる場所をつくると、走り回る雰囲気をコントロールすることができます。

姿勢が低くなることによってパーソナルスペースは小さくなるので、それぞれに夢中になる場面が近くにあり、なんとなく近くで過ごす人の状況が伝わりやすくなります。家庭的な雰囲気が醸し出されます。

写真上2点／延長保育の夕食の様子。この日は卒園した小学生が預かり保育を利用していた。園児たちは小学生が来るのを楽しみにしている。
写真下／日によって人数が増減する延長保育。この日は少人数で、声かけしたわけでもなく、子どもたちはマットを敷いたスペースに集まった。（にじのいろ保育園）　撮影／丸橋ユキ